

《優秀賞》

「戒めと感謝を胸に」

二本松第二中学校 一年 佐藤 梨乃

夏の暑い日差しの中、私はある石碑の前に立ちました。ひっそりと佇む大きな石碑の古びた表面には、力強くしっかりとした文字が刻まれています。二本松に住む人なら一度は目にしたことがあるであろうその石碑は「戒石銘碑」。今も旧二本松城の入口にあたる場所にあります。この戒石銘碑には藩士の戒めとして「お前がお上からいただく給料は、民の汗と脂の結晶である。下民は虐げ易いけれども、神をあざむくことはできない。」という意味の十六文字が刻まれています。二本松藩が政治を行う指針として、民を思いやる藩訓として掲げたのが戒石銘でした。この精神は、実際に福祉制度を充実させる施策にもつながったと城報館で学びました。「人は一人では生きられない、だから、感謝して支え合うことが大切だ。」戒石銘の教えは藩士だけでなく、私には人としての戒めとしてこう言われているような気がしてならないのです。

「人は一人では生きられない。」そんな当たり前のことを実感させられたのが、コロナウィルス感染拡大です。それまで当たり前だった日常が一変し、私の日常も少なからず影響を受けました。学校が休

校になり、学校で勉強をすることも、友達に会うこともできなくなりました。行動制限や感染対策など、今まで感じたことのない不自由さと不便さ、不安を感じる日々でした。学校や公共施設、会社が次々と閉まり、街から人が消えました。人が消えると社会活動が動けなくなり、行き場を失くした食材や品物を抱え、途方に暮れる人もいました。店からマスクや消毒液がなくなり、病院ですぐ診てもらうこともできなくなりました。しかし、そんな非常事態の中でも、必死に治療してくれた医療従事者の皆さんがいました。マスクを手作りして寄付する人、医療従事者に無料で弁当を提供したり、また、温かい手紙を届けたりする多くの人がありました。私は、どんな困難でも立ち上がる人の強さと、どんな時でも人を思いやる優しさに触れた気がしました。と同時に、私が当たり前と思っていた何不自由ない生活はたくさんの人に支えられて成り立っていたことに気づかされたのです。

『人』という字は人と人が支え合って成り立っている。『コロナ禍を通して人という存在の意義をあらためて感じる事ができました。そしてまた、コロナ禍の日常は私に感謝の気持ちの大切さにも気づかせてくれました。時代を越えて人としての戒めを私の心に刻ませてくれた戒石銘に感謝の思いでいっぱいです。』

暑い夏が過ぎ、もうすぐ秋が訪れます。黄金の稲穂がなびくあの景色が、私は大好きです。戒石銘の教えを知った今、私にはあの稲

穂が二本松の人の姿のように感じるのです。まるで、稲穂が頭を下げるように互いに感謝し、身を寄せ合い支え合って生きてきた先人達の姿のように。「人は一人では生きられない。だから、感謝して支え合うことが大切だ。」と。

戒石銘の教えが根付く二本松に生まれ育ったことに誇りを持ち、先人達の思いを守り継ぐことが今の私にできることだと思っております。もうすぐ訪れる黄金の稲穂がなびくあの景色と戒石銘を胸に刻み、私はこの二本松で感謝の気持ちをもち続けていきます。